

提唱 槐安国語鈔講話(十二)

頌古

第九則 巖頭^カ字

白田 劫石

垂示に曰く、昔一士人あり、金を持し劍を脱して、壮士、劍舞の掣電の如くなる者を募って、而して寇に報ぜん^{あた}と欲す。

壮士 劍を帯びて窺うこと累日、一日寇の六七輩を卒^{くみ}して談笑し来るを見て、壮士走り進んで劍を抜いて一刀に両断し去る。其の神速、傍觀総に知ること無し。只 手を以て一払して去ると謂えり。寇行くこと三五歩、俄然として倒ること瓜を割るが如し。人各々初めて大いに驚悲すれども彼の壮士の所在を知らず。

法戦も亦然り、明眼の宗師 人を殺して眼を^{へん}眩せず。学者往々に喪身失命すれども知らざる者多し。

禅の修行は、一口でいえば、人々が自分の心の本体を明らかに、その心を自由自在に使いこなすための錬行といってよい。

だから特別な神仏の信仰とか、思想・教条とか、所依の經典などといったものは、一切必要がない。

そこに、これからの新しい世界に向かっての斬新でかけがえのない、人類の指針を示す尊い教えとしての価値がある。

後近代の宗教といわれる所以である。

さて心といえば捉えどころのないものであるが、これを古くから鏡や玉や劍に譬えている。

一面から見れば、心は万物のすがたや目前の人物の境涯の有様をその真実の実相のまま映し出す明鏡のような働きをもっている。この前に出ると、いかなる人物も自分の心の中を隠すことができない。照魔鏡といわれる。

また徳という面からみると、心には万徳が具備されていて欠けるところがない。まことに円満で、珠玉のようにすばらしく、人をして讃仰せしめる。仁義礼智信、悉くその中にある。

更には又実践し断行して事をさばくという機用の面からは、剣にたとえられる。快刀乱麻で、どんなに入り組んで乱れている事態も、一刀両断して、道を開かしめる。しかもその切れ味が見事で、切ったという形跡が見えない。

同じ心であるが、そのように時と所と相手や状況によって、このように千差万別のはたらきをする。

さて今回の則は、その剣のはたらきの切れ味を示す一則である。

いまの人は、剣を以て人を殺すなどというと、現代には通用しない封建社会のことにように思うが、これはあくまでも心のはたらきを言ったままで、剣をもって切ったはったという物騒なことをするわけではない。

心を鍛錬する上で、どんな逆境においても自由なはたらきができるように生きた実境涯を磨いておかないと、いざという時の役に立たない。単に知識として知っているの、論理の上でどうであるのというだけでは、急場を切り抜けることができない。

禅では、実参実証によって、法戦場裡に臨んで心を鍛え上げるのである。

この垂示は、明眼の師家が、学人の後生大事にもっていて手放さない業障や我見の根城を一刀両断に截断して、本来の面目を得せしめてやるはたらきを示したもので、我見の根を殺し尽くさねばほんものは出てこない。

本則の巖頭の冴えきった剣のはたらきを向こうにおいた垂示である。

本則に出てくる僧は、巖頭に首を落とされてもそれに気づかない。巖頭の方は、瓜を割るように一刀両断しているが、斬ったという沙汰がない、手目が見えない。何とも見事である。

拳す、巖頭 僧に問う、何れの処より来る？ 僧云く、西京より来る。頭云く、^{こうそう}黄巢を過ぎて後、還って剣を取得すや？

僧云く、取得す。

頭 ^{とう}頸を引き、^{くわ}近前して云く、^{こうべ}団！ 僧云く、師の頭落つ。

頭 呵々大笑す。

僧 後に雪峰に到る。峰問う、何れの処より来る？ 僧云く、巖頭より来る。峰云く、何の^{ごんく}言句が有りし？ 僧 前話を拳す。雪峰打つこと三十、^お逐い出す。

拳す、巖頭 僧に問う、何れの処より来る？ 僧云く、西京より来る。

さて巖頭といえは、徳山の会下にあつて「大小の徳山末後の句を会せず！」と言い放ち、天下に鳴りひびいて、学人から恐れられている徳山宣鑑禅師の法嗣の^{ぜんかつ}巖頭全巖禅師である。

その巖頭のところへある時、僧がやってきた。そこで巖頭はきいた。“お主何処から来た？”この問いは何でもないようであるが、恐るべき魂胆が隠されている。唯の問いではない。魚を釣らんとして、釣竿を垂れた。「命 懸系の如し」である。

それに対してこの僧は知ってか知らずしてか、ありのままを答えた。“西京より来る。”

下語。【命を負う者は、^{こう}釣に上り来る】よくよく運命の尽きた奴じゃ。その釣系にかかってきた。

頭云く、黄巢を過ぎて後、還って剣を収得すや？ 僧云く、収得す。

西京とは長安の都で、黄巢という人物は、唐の末に長安を治めて、国を大齊と言ったが、ある時、剣を拾い、その剣に「天 黄巢に賜う」との銘があったという。天下の名剣である。

そのことにかからせて、“お主は西京から来たというたな？ それなら黄巢の剣を拾ってきたか、どうじゃ？”ここでこの黄巢の剣とは、いうまでもなく人々が生まれながらにもっている心の名剣のことである。

下語。【崖に臨んで人を推す、是れ好心に非ず】崖からつき落として命根を殺せんとの巖頭の魂胆である。恐ろしい。

これに対して、僧は“はい拾ってきました” そんな人々本具底などは、とっくの昔悟っておりますというが、こやつ知っておるが、使えない。

下語。【果然として語に随って解を生ず】学解底じゃ、禅学である。置水練であって、役に立たぬ。

頭 頸を引き、近前して云く、因！ 僧云く、師の頭落つ。頭 呵々大笑す。

それに対して巖頭は、「頸を引き」というのは、首を延ばして、云く、“因！”

これはチョット見ると、さあ俺の首をその剣で切ってみよ、といって首をエイッ！とさし出したように見えるが、どうしてどうして、この端的には恐るべき剣の切れ味が隠されている。白隠老漢も「評」で「譬えば金翅鳥王の阿盧大海に入って、雪浪を劈開して直に龍を取って呑むが如し」といっておられる。

下語。【卵を見て夜を時わんことを求め、弾を見て鳥の炙を求む】これは、こんな坊さんにそのような奥の手を出すのは早い、卵を見て時を告げさせる鳥を思ったり、弾丸を見て焼鳥の支度をするよう

なものじゃ、との意。これは、そのような奥の手の全体作用か？

この坊さんは、自分の首が落されているのも知らん。

「僧云く、師の頭落つ。」

下語。【満面の慚惶、強いて惺々】自らの恥も知らん。晒しものになっているのも分っていない。

それを見て、巖頭は呵々大笑した。この笑いも恐ろしい。

下語。【天関を回し、地軸を転ず】まことに虚空消隕し、鉄山摧くという有様である。【骨を敲き、髓を取る】ど性骨を叩き割られて、あとかたもなく木っ端微塵となった。三世の諸仏も面出しができない。

僧 後に雪峰に到る。峰問う、何れの処より来る？ 僧云く、巖頭より来る。峰云く、何の言句か有りし？ 僧 前話を挙す。雪峰打つこと三十、逐い出す。

この坊さん、垂示にあったように、自分が一刀両断されたのも分からず、のこのこと雪峰のところへやってきて、この一部始終を得々として話した。

雪峰は、巖頭と同じく徳山の会下で兄弟弟子であり、よく肚知りあった同士の雪峰義存禅師である。

下語。【款に依って案を結す】この坊さんは自分の罪状を自ら供述しているようで、いかにも憐れである。口を開けて腹まで見せているあけびのようじゃ。

おめおめと前の因縁を話したところへ下語。【山中古廟裏の無転智の大王】人里離れた古い祠の中の大王、賽の神で、有気の死人じゃ。禅についてのいろいろと物を書いている多くは、この類である。

雪峰は、再犯を許すわけにゆかぬ、間髪を容れず、三十棒を与えぶちのめした。【鉗鎚妙密、斧削森巖】その棒の味わいはまことに妙密を極めている。痕がみえぬ。打ったという沙汰がない。

【風定まって花猶落ち、鳥啼いて山更に幽なり】森閑と静まりか

える中、カタリと花が落ちる。外見はのどかさそのもので、厳しさが全く見えぬ。その老練さは舌を巻くばかりである。

白隠老漢も「評」でここを「華夷境を並べて乾坤一に、日月光を離^{つら}ねて昼夜照らす」と述べている。三十棒して、棒の用を少しも見せずというところじゃ。

これが黄巢の剣のはたらきなり。

頌 日

黄巢過ぎて後 剣収め難し
 提去提来 手を傷つけて憂う
 是れ山藤三十下^げせずんば
 梵天の余血 五湖に流れん

本則の巖頭と僧の商量をこの一句におさめた。

黄巢過ぎて後 剣収め難し

「剣収め難し」とは、この僧にかけて、人々本具の一振りの名剣を脚実地に自由に使いこなすのは容易ではない。多くは、この僧のように蹉過し了る。

黄巢の剣を収得して甚だ痛快であると思い、得々としている。ところがこれが、大きな敗闕であって、この剣は実は収め難い。

だから下語には、【^{こうとう}鈎頭の意を識取して、定盤星を認めることなかれ】とある。^{はかり}秤の皿にのせてある実物を見ないで、秤の目盛りの方ばかりを見て、宝を失ってしまっはいかんというのである。禅学はいかん。

提去提来 手を傷つけて憂う

僧は、いい気になって巖頭の首を落したものと思って、得々として雪峰のところへやって来た。

これは黄巢の剣を提げて、自分がそのために、手傷を負い、命を

失っているのに気づいていない。まことに気の毒千万である。

『碧巖集』のこの「黄巢収剣」の則の「評」に、円悟が、龍牙が徳山に参じた折、これとほとんど同じ問答をして、洞山のところに行ったときに、洞山から「我に徳山の落つる底の頭を返し来れ」といわれて、その言下に大悟したという因縁をあげている。

このように言われたら、本則の僧はどうしたであろうか。

ここの【穿耳の客に逢うこと稀なり。多くは舟を刻む人に遇う】という下語は、如是の活法を軽忽して、禅学ばかりをやっている手合いによって、法は亡びてしまうという含みをもたせてある。

多くは、この剣によって身を傷つけている者ばかりである。

是れ山藤三十下せずんば

明眼の雪峰は、この僧の境涯を一見弁見して、来風を弁じ、直下に三十棒を見舞った。山藤とは、拄杖子のことである。

もしこの三十棒がなかったら、何によって祖師の真風を伝えることができようか。

黄巢の剣のすばらしい切れ味を、物の見事に示してみせてくれた。

下語。【善く守る者は、九地の下に蔵れ、善く攻める者は、九天の上に動ず】 棒の自由自在のはたらき、千変万化、目にもとまらぬ。身を隠したかと思うと、九天の上に立って天下の人の舌頭を截断する。まことに端倪たんげいすべからざるものがある。

棒とはもちろん剣であり、人々具足の黄巢の剣である。これをほんとうに手にしたものは、自由自在である。誰でも鍛錬でこうなれる。

梵天の余血 五湖に流れん

この血というのは、学人の多くもっている見泥の汚血で、いらざるものをついでいる我見や仏見・法見である。

禅の修行は、これを叩き殺すことに眼目がある。

この僧のように、いいかげんな所得や学解をひっかついで、自分

でそれに気づいていないと、そのために、その汚血に毒されて平地上死人無数となる。

いかにもよい打ち処であった、これを放置すれば大変なことになった。この三十棒によって救われた。

【出身は易く、脱体に道うことは却って難し】この下語は、悟るのは易いが、悟得を離れて凡夫に戻って、時々刻々に変化する事々物々上で、活発発地に働らくのは容易ではない。「道^いう」というのは、道得で口で言うばかりではない、生きた道のはたらきである。

涅槃智は暁らめ易く、慈悲行は明らめ難いと同意である。

禅学でいい気になって見泥の汚血に染まって、自らそれに気づいていないほど恐ろしいことはない。

ご用心！ ご用心！

著者プロフィール



^{ごつせき}
白田劫石（本名 / 貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和12年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅三世総裁・師家。庵号 / 磨^ま輒^{せん}庵。平成21年2月帰寂。